

祝火考 —サダ祭の変遷—

浜 畑 祐 子

火、人類がかつてかち得た最大のエネルギー源、荒々しく危険な破壊物であると同時に、その浄化作用によって人類を救い、日常生活に活力を与える火。この火を主体とした祭は、ヨーロッパのヨハネ祭や四旬節、あるいはわが国の小正月の左義長など枚挙にいとまがなく、広く世界に分布していたはずである。

節目の日に、人々は共同体あるいは個人単位で過去から伝承される手法にのっとり、野外で祝火を焚く。それを踏び越え、家畜を潜らせ、周辺で乱痴気騒ぎをすることで、また炬火を携えたり、灰や煙、燃えさしを利用することで、無病息災、豊穰祈願、悪霊祓浄がなされてきた。そして最終的には共同体、家族の紐帯を強固にし、危険な時機を乗り越え、新たな生活への突入を計ってきた。

イランでも古来、火に関する伝承は多く、アーザル祭と称される火祭りが曆上に記されている。①シャフリーヴァルガン（シャフリーヴァル月、シャフリーヴァル日）、②アーザルガン（アーザル月、アーザル日）、③チャハールシャンベエ・スーリー（春分前最後の火曜日の夜）、④サダ祭（バフマン月、アーバン日）（サッフアー p. 107）がそれである。各月と曜日に固有の名をつけるイラン曆では、月名と曜日名の重なる日を祭日とする。①、②はこれに属するが、両者とも記述もほとんどないままに消滅している。③は現在でもイラン各地に見られ、一列に並べられたたき木の山を踏びこえ、健康と祓浄を願う祭である。新年祭の一環をなす行事でもある。④は最もだけしい自然の火をそのまま写した祭りであり、バフマン月アーバン日（10日）に戸外で焚かれる祝火をさす。ピラミッド状に数メートル、数十メートルもうず高く積まれたどんどが、一気に燃えあがるさまは圧巻であるが、残念なことに現在ではわずかヤズド、ケルマーン周辺のゾロアスター教徒の手で細々と伝承されているにすぎない。

以下このサダ祭について概略をのべる。

サダとは「100日目」を意味する単語で、1年を7ヶ月の夏と5ヶ月の冬の2季に分

けた古代イラン人は、冬の始まりであるアーバン月1日から数えて100日目にあたるこの日、つまりバフマン月10日を祭の日とした。あるいは、この日からノウルーズまで50昼と50夜となることから、あわせて100日と考えた。また、ノウルーズから50日目つまりバフマン月10日から100日目にあたる頃が大麦や小麦の収穫期と重なることから祝われたなど種々な説があるが、その起源は定かではない。シャーナーメ（王書）では、サダを悪と暗黒を代表する蛇と相対するものとしての火の出現、及びその火のこもる場所としての、石を用いた発火法の発見者であるフーシャングに結びつけている。以来ゾロアスター教徒の手で伝播され、ササン朝以降壮大な祝火を焚くことが、諸王の権力の象徴ともされたことから、歴史書にも多く見られるようになった。例えば、ヘジラ暦323年のマルダヴィージュ、同426年のスルタン・マフムードのそれは特に有名である。

諸王はバフマン月10日の夜に、川辺や丘上で、何基もの祝火を焚き、まだ生きている動物を火に投げ込み、羽にタールや石油を塗った鳥に火をつけて飛ばしたものである。そして火の周辺に座し、暗闇の中に燃えあがる動物や鳥の飛びかうさまを観ながら会飲に興じた。火柱のように一気に燃えあがる荒々しい火は、時として何十キロも離れた所からも確認されたという（バイハギー1350/1975, pp. 571—572）。

しかし13世紀以後、残念ながらサダは急速にイラン人の脳裏から忘れられてしまい、その後二度と往時の勢いを盛り返すことはなかった。そして現在では、春分を新年とする現太陽暦に基づき、サダはバフマン月10日に一応固定され、ケルマーンやテヘランのゾロアスター教徒は伝統的にこの日にサダを行なっている。冬至から40日目にあたる解斎の時でもある。

しかし、現イラン暦がグレゴリ暦に盲目的に追従したものであり、1年が $6 \times 31 + 5 \times 30 + 29 = 365$ 日と定められたため、バフマン月10日は実質的にはバフマン月4日に相当する。というのも伝統的なゾロアスター暦は $30 \times 12 + 5 = 365$ 日の構造を持ち、各月が30日であったが、現イラン暦では前半6ヶ月が31日となるため実質的に6日間のずれが生じるわけである。

一方ヤズドのゾロアスター教徒達は現在でも、アーザル月アシュタード日（26日）にヒーロンバ（Hiromba）と称する火祭りを行なっている（ボイス1977, p. 176）。閏を念頭に置くと、ノウルーズの前ちょうど100日となる。火祭りをノウルーズの予祝と考えれば前者（バフマン月10日のサダ祭）より、後者の方がふさわしいかも知れない。ボイスの記述からシャリーファバード村での火祭りを簡潔に紹介しよう。前日からシャリーファバード村の少年達は柴や枯れ草などを集めに郊外へと出ていく。土漠地帯にあるヤ

ズドでは焚き木捜しは容易ではなく、少年達はこの大役を果たすと大人の仲間入りができるという。通過儀礼の役割も含んでいるのだろう。当日は早朝から屋外でアーシュが作られ、幼ない子供達が戸毎に薪を集めてまわる。日没後、カナートがそばを流れる拝火殿にうず高く積まれた塞燈に点火されるや、一瞬にして雄々して火が燃え上がり、熱狂した村人が二手にわかれ互いに声高に掛け合いをしたりする。その時故人の名も次々に呼ばれる。翌朝には娘達が火壺に燃えさしと灰を集め、家に持ち帰って改火、聖火として保存する。この祭りは3日間続いた（ボイス1977, pp. 177—185）。

3世紀のアルダシールによるゾロアスター教暦の改革により（ボイス1979, p. 104）、それまでの1年=360日の暦の年末に5日加えられ、365日とされた。この結果暦上に固定されていた祭日にずれが生じ、各祭りはこの5日を加え連続した祭りとして祝われたり（例えばガーハンパール）、また、ノウルーズやミフルガーンのように1日と6日の2回祝われるか、あるいは2つの別個の祭りと化するかした。ゾロアスター教徒は1日と6日のノウルーズを別々の名称のもとに祝っている。この改暦後サダ祭も6日間連続して祝われるようになり（ボイス1977, p. 176）、サダの5日前はノウ・サダ、あるいはバル・サダと呼ばれた（ビールニー—1318/1957—1958, p. 258）。本来は1つの祭りであったサダ祭が、43日間ものずれがあるにせよ、サダ・ヒーロンバと2つの別個の名を持つ祭りとして生き残った可能性もある。

しかしともかくもゾロアスター教徒の間ではケルマーンのバフマン月10日、ヤズドのアーザル月26日と2種のサダがあり、ヤズドではケルマーンの影響で、近年バフマン月10日にサダを行なうようになったが、それでも一部村落では依然として旧来の月日が固守されている（ボイス1977, p. 177）。いづれにせよ、両者とも厳冬期の祭りであったのは事実であり、冬の寒さを追い出し、春の来訪を促す、また悪霊を追い払う祭りであったにちがいない。境い目の行事である。

しかしこれとは別に、1964年のサダ祭がヤズドでは4月22日一致していた（ボイス1977, p. 176）。またケルマーンでもノウルーズから40日後つまり4月10日前後にサダが行なわれていたという（パリーズィー1978, p. 331）。ゾロアスター教徒の伝統的な暦では新年7日がアーザル月1日に相当することに起因するわけであるが（ボイス1977, p. 175）、一方ではクルド族が新年13日に改火をしている（オウラング1335/1956, p. 101）。前述①のシャフリーヴァルガーン、②のアーザルガーン両祭もかつては暦の変遷から冬の始めとされた時もあった。冬の寒さを追い払うため、火祭りが必要とされたのである。境い目の行事としての火祭りである。これらもまたサダである。ボイスはサダ

を100日目の日とするのは、単にサダを暦上に固定したいがためではないかとも指摘している（ボイス1968, p. 213）。サダは移動暦の性格から暦上をさまよい、種々な節目で祝われたのであろう。

以前はイラン全土でこのような公共性の強い祭りが行なわれ、これを通して共同体の活性化と紐帯が計られたことだろう。まさしく境い目の行為である。

以上足早にイランの祝火の変遷を見てきたが、この種の祝火は前述したように世界各地に広く分布し、イラン固有のものではない。

人々は祝火を媒体に、寒い冬を追い出し、ありとあらゆる害を浄化し、また火そのものを浄火することで世界を、そして共同体をも一新したのである。そして祝火をもらうことで、個人はより一層共同体と結びつけられ、共同体自身の秩序も確実に回復する。

このような観点から見ても、サダがいかに重要な役割を帯びていたか明白となろう。

参 考 文 献

- Aurang, Sargord. 1335/1956. *Jashnhā-ye irān-e Bastān*. Tehran.
- al-Bīzrūnī, Abū-Raiḥān Moḥammad b. Aḥmad. 1318/1957—1958. *Kitāb al-Taḥfīm* ed. J. Homā'i. Tehran.
- 1352/1974 *Āsar al-Baqiyah*. ed. A. Dānāseresht. Tehran.
- 1879 *The Chronology of Ancient Nations*. trans. C. E. Sachau. London.
- Baihaqī, Moḥammad b. Ḥosain. 1350/1975. *Tārīkh-e Baihapī*. Mashhad.
- Boyce, Mary. 1968. "Rapithwin, No Ruz, and the Feast of Sade," *Pratidanam, Studies in Honour of F. B. J. Kuiper*. The Hague.
- 1970 "On the Calendar of Zoroastrian Feasts." *BSOAS*, vol.33 pp. 513—539.
- 1977 *A Persian Stronghold of Zoroastrianism*. Oxford.
- 1979 *Zoroastrians, their Religious Beliefs and Practices*. London.
- Deylamiyānī, Alī Khorvash. 1342/1963. *Jashnhā-ye Bastānī-ye irān*. Tehran.
- Farahvashī, Bahram. 1356/1977. *Jahan-e Farvarī*. Tehran.
- Ferdousī, 1345/1965—1966. *Shāhnāmeḥ Ferdousī*. Tehran.
- Frazer, J. G. 1980. *The Golden Bough*. Hong Kong.
- Qavīm, E. 1334/1955-1956. "Jashn-e Sadah." *Armaghān*, 24th year no.7,8, pp. 297—308.
- Khāntarbiyat, Mīrza Moḥammad'Alī. 1322/1943—1944. "Jashn-e Sadah." *Armaghān*, 12th year no.11. pp. 745—751.

- Modi, Jivanji Jamshedji. 1922. *The Religious Ceremonies and Customs of the Parsees*. Bombay.
- Parizi, Bastani. 1978. *Khatun-e Haft Qal'eh*. Tehran.
- Şafa, Zabih ol-lah. n.d. *Gah-Shomari va Jashnhaye Melli-ye Iranian*. Tehran.
- Taqizadeh, Hasan. 1937-1939. "Various Eras and Calenders used in the Countries of Islam."
BSOAS, vol.9 pp. 903—922.
- 1938 *Old Iranian Calendars*. London.
- 1952 "The Old Iranian Calenders again." *BSOAS*, vol.14 pp. 603—611.
- 1358/1979 *Gah-Shomari dar Iran-e Qadim*, ed. I. Afshar. vol.10 of *Maqalat-e Taqizadeh*. Tehran.